

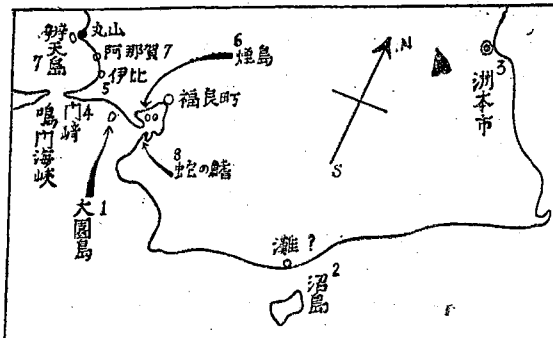
# 南部淡路島産の海藻

広瀬弘幸

ここに南淡路と申した地域は大体福良湾を真中に西は弁天島、東は洲本市に至る海岸を指す。過ぐる昭和28年8月、篠山農大並に本会主催の臨海実習が福良町で催された折、会員諸兄の熱心な努力にも拘らず、採集品は少数種に限られたことは残念であつたが、この為に会員中に海藻とはこんな位にしか取れないものとの早合点に随られない為と、且つは同学の士の参考の為に、当地域産の海産植物について、(1)出現の時期、(2)海藻の棲息の状況、(3)主な採集好適地並びに、(4)種類について述べよう。

## (1) 海藻の出現時期

海藻の一生は1カ月乃至10カ月の寿命のものが大部分であるし、孢子発生の際の外圍の諸条件の如何で、夥しく繁茂したり、僅かしか出現しなかつたりする。孢子発生の諸条件のうち、特に水温は重要な条件であり、水温は大体季節、気温と平行するので海藻の出現は、(したがつて海藻採集の際の収穫の多い少ないは)季節に左右される。実際当地方に於て例年では4月より6月、別けても5月中旬が最適といえよう。例えば過ぐる8月の採集会の折苦心して渡つた大園島の石塊や岩板上には既に殆んど、顯著な群叢は認められなかつたが、春頃ゆくと全ての石塊、岩板が褐色のネバリモ、カヤモノリその他の大群叢で占居されている。又舟で渡つた海峡の部分は見渡す限り、アカモクを主としたホンダワラ科植物の群落で、為に舟の動きがつかなくなる程である。



瀬戸内海沿岸線の海藻の夏枯れ時も但馬海岸では模様がすっかり変る。日本海岸では5月でも早すぎ、7月か8月初旬迄が採集に最適である。此事については他日稿を改めて述べる。

## (2) 海藻の棲息の状況

潮の干満との関係……昔から潮の干満と海藻の分布

との関係、換言すると、海藻の垂直分布については色々な試みがなされたが、ここには一番普通に用いられている分け方に従つて、当地方に見られる種名を挙げると

灌水帯……門崎、沼島等の外湾性の場所で直接波の影響の大きい所に、アマノリ、フノリ及び藍藻のリングピア、リビュラリアのしとね状の群叢が見られる。

潮間帯……干潮線と満潮線との間で随つて1日に平均2回は必ず藻体の露呈する部分である。この帯に出現する海藻の種類及び量は比較的多い。アオサ、オアノリ、ヒトエグサ、シオグサ等の緑藻はその占める面積が最も広く又最も人目を引くものの一つでもある。褐藻ではネバリモ、カヤモノリ、ツルモ、イシゲ等、紅藻では、ムカデノリ、コメノリ、オゴノリ、イソダンソウ、イバラノリ、ワツナギソウ、イトグサ等が見られる。

漸深帯……潮間帯に見られる種類はそのまま此の帯にも伸びている。此の帯のみに見られるもののみ挙げると、ミル、ハネモ、ワカメ、アカモク、テングサ、タオヤギソウ、ヒビロウド等で、又海藻のアマモ、スガモ、ウミヒルモ等の類が見られる。

## (3) 主な採集好適地

地図中の地名に番号を附したのは、割合楽に種類が多くとれる順位を無理に示したものである。即ち、1大園島、2沼島、3洲本市近郊海岸、4門崎、5伊比6煙島、7阿奈賀及び弁天島、8蛇の鱧の順になるだろうか。春より初夏にかけての大潮時の干潮をねらつて出かければ、干満差の比較的大きい当地方では、上記のいずれの地点でも思いもかけぬ多くの、そして時として珍らしい収穫物にこおどりされるであろう。

## (4) 海藻目録

本格的な調査は未だ行われてはいないが、今迄に折にふれ採集した結果から判明したものを列記すると下記の目録の通りになる。恐らく将来同学のみなさんの調査をまつてこれに多数の種類が追加されるだろう事は申す迄もない。

藍藻類 リビュラリア、リングピア、カコスリックス、アイミドリ。

緑藻類 ヒビミドロ、アナアオサ、ボウアオノリ、ウスバアオノリ、ヒトエグサ、シオグサ、ホソジュズモ、ハネモ、ミル、イモセミル。

褐藻類 シオミドロ、ラルフジア、クロガシラ、モ

(p.206へ)

# 扇山の昆虫

奥谷 禎一

1953年8月18日、兵庫生物学会の催しとして扇山の採集会があり、私はそれに参加させて頂く機会を得た。扇山は海拔1300mで、兵庫県では氷ノ山に次ぐ高山であるが、今日まで昆虫採集に登つた人はいないらしい。文献にも氷ノ山は出てくるが、扇山はなかなか見当らない。したがって、ログな所でないのだろうと思ひながら行つた次第である。

ところが、驚くべき好採集地であるのに目を見張つた。途中、開拓団の入居している所まで、わずかに数本のモミを見ただけで、全く針葉樹がなく、頂上附近は1500町歩の大ブナ林である。関西以西唯一の大森林だということである。うち500町歩は開拓の計画であると聞いたが、残りの1000町歩は、天然記念物として保護したいと思う。

さて、採集し得た昆虫であるが、あいにくシーズンが遅く、総計70頭ほどしか採集できず、しかも小さな不明種がほとんどであるので、私の手におえるものはほとんどなかつた。そのうちから、2、3興味をひいた問題を記してみよう。

特に興味を感じたのはセミの Fauna である。普通の山では下の方ではアブラゼミ・ニイニイなどで、次にミンミンが相当高い所まで分布し、ミンミンが減つた頃にはエゾゼミがきこえ、最後にコエゾ・エゾハルゼミなどが聞けるのである。しかし、扇山では、ミンミンの次にコエゾが分布し、エゾゼミをとばしているのは面白い。これは恐らくエゾが針葉樹を好み、その針葉樹がないためだろうと思われる。となりの高山氷ノ山では、500~700mの熊次村でエゾがかなり鳴いている。それから上の1000mあたりのブナ林ではコエゾ・エゾハルがいる。もちろん扇山の500~700mの所で、じつと耳をすますと、遠くのアカマツの林からエゾがないのがきこえてくるが、とにかく扇山自身にはいないようだ。またエゾハルは、関東の山では9月までいるから、8月中旬ではまだ当然いると思われるのに聞こえなかつたのは、やはりいないのかも知れない。エゾとコエゾは鳴き声が非常に似ているので、何度も耳をうたがつたが、遂にエゾは聞けなかつた。

開拓地附近はブナや他の闊葉樹が切り倒してあり、これより、カミキリを数種得た。ヒゲナガゴマフカミキリ *Apalimna liturata* は大山でかつて採集したと同じように生懐し、ウスイロトラカミキリ *Xylotrechus*

*cuneipennis*, ニイジマトラカミキリ *Xylotrechus emaciatius*などが産卵に来ていた。また、ルリボシカミキリ *Rosatia batesi* の美しい姿も見られ、セダカカミキリ *Echthistatus grossus* が面白い姿を見せていた。私の専門のハバチ類では、わずか5種で、*Tenthredella viridatrix*, *Propodea fentoni*, *Aneugmus kiotonis?*, キイロハバチ *Waldhaimia japonica*、他不明1種であつた。これはシーズンの関係で少いので、恐らく相当の種が分布していることであろう。その他日本のカで最も大きいトワダオオカ *Megarhinus towadensis* を得たが、恐らく兵庫県下では最初の記録であろう。何分、前述の如くシーズンがわるく、目録にもならないので、扇山の昆虫について概観してみた。今後機会を見て充分の採集を試みたい。

なお、カミキリの学名、和名は「水戸野(1940): 日本産鞘翅目分類目録天牛科」によつた。

(p. 205から)

ゾク、ネバリモ、フクロノリ、カゴメノリ、ハバチドキ、西洋ハバチノリ、エゾブクロ、カヤモノリ、イシゲ、ケウルシグサ、ウルシグサ、アミジグサ、ウミウチワ、オキナウチワ、ツルモ、ワカメ、ヒジキ、ヨレモク、イソモク、アカモク、ウミトラノオ、ノコギリモク、ヤツマタモク。

紅藻類 ウシケノリ、アサクサノリ、ベニマダラ、マクサ、ユイキリ、ムカデノリ、ツルツル、コメノリ、マツノリ、ヒビロウド、カキノテ、ビリヒバ、イシゴロモ、フクロフノリ、ハナフノリ、イバラノリ、ヒメユカリ、イソダンツウ、オゴノリ、ワツナギソウ、イギス、エゴノリ、イトグサ、ダジア、ミツデソソ、フジマツモ。

## (5) むすび

吾々教職にあるものが自由に研究に使える季節は夏期休暇であるが、夏期に於て、海藻採集に比較的満足な結果を得る為には、県下では日本海岸の香住、諸寄等の諸海岸が最適かと考える。然し、沼島、鳴門海峡の絶景を控えた当地方は、採集以外にも種々の利得があり、採集季節を夏も少し早い目にすればかなりの収穫のある事は申す迄もない。